

## 非認知能力

- ◇ 「非認知能力」ってお聞きになったことはありますか？ 最近、あちこちで話題となっている言葉です。ちょっと前、ある研修会に出席した折、文科省の方が、その中で「大人になってからの社会的、経済的成功をもたらすものは、認知能力ではなく非認知能力である」ということを言われていました。気になるキーワードですので、ちょっと触れておきたいと思います。
- ◇ 経済協力開発機構（OECD）では、非認知能力を「社会情緒的コンピテンス」と言い換えています。どうやら新学習指導要領等とも大きく関わる力のようです。新指導要領では、「資質・能力（コンピテンシー）の三つの柱」として、（１）知識・技能（２）思考力・判断力・表現力等（３）学びに向かう力・人間性等…の育成を目指すことを掲げています。この（３）が、社会情緒的コンピテンスに当たるようです。

◇ 非認知能力とは、読んで字のごとく、認知能力に非ずという広い概念であり、いわゆる「見えない学力」と言われているものを指すと書かれていました。（株）ベネッセのHPにまとめたものが掲載されていたので紹介します（右表）。近年の研究では、幼児期の知的教育による効果は一時的に過ぎず、長続きしないことが明らかになりつつあるとも書かれていました。学校

### 非認知能力とは何か

学術的な呼称	一般的な呼称
自己認識(Self-perceptions)	自分に対する自信がある、やり抜く力がある
意欲(Motivation)	やる気がある、意欲的である
忍耐力(Perseverance)	忍耐強い、粘り強い、根気がある、気概がある
自制心(Seif-control)	意志力が強い、精神力が強い、自制心がある
メタ認知ストラテジー (Metacognitive strategies)	理解度を把握する、自分の状況を把握する
社会的適性 (Social competencies)	リーダーシップがある、社会性がある
回復力と対処能力 (Resilience and coping)	すぐに立ち直る、うまく対応する
創造性(Creativity)	創造性に富む、工夫する
性格的な特性(Big 5)	神経質、外交的、好奇心が強い、協調性がある、誠実

出所：Gutman, L. M. & Schoon, I. (2013) The impact of non-cognitive skills on outcomes for young people. Education Endowment Foundation をもとに筆者作成

教育が「認知能力」よりもむしろ「非認知能力」を育成する場として優れているのではないとも言われ始めているのは、このような研究結果から考えられたものかもしれません。この非認知能力とは、机に向かって一人で獲得できるような類のものではなく、家庭や学校のなかで、親や教師、友人らと関わることによって身につけるものだそうです。読み書きや計算、英語といった知的教育の成果は目に見えやすく周囲と比較しやすいだけに、保護者として敏感になりやすいものですが、目に見える学力を伸ばすことばかり気を取られて、人生の土台となる非認知能力を育てる視点が

すっぱりと抜け落ちてしまわないように十分な注意が必要ではないかと感じた次第です。

非認知能力は具体的にどう働くのかというと、一例として算数の問題の解き方を学習する場面が紹介されていました。まず、算数の問題を解くためには、授業の内容を理解したり、公式を暗記したりといった「認知能力」が求められます。しかし、それだけでは不十分で、理解できるまで根気強く勉強を続けたり、友だちと教え合って理解を深めたりといった非認知能力の支えが必要です。学年が上がって努力や工夫が求められるようになるにつれて、非認知能力の支えがなければ主体的に学び続けることができず、伸び悩んでしまう可能性は高まるということです。

欧米などの先進的なところでは、知的教育ではなく、非認知能力を伸ばす教育へと重点をシフトさせているのが世界的な潮流だということです。早期教育に力を注ぐ日本の状況は、国際的には逆行しているという否定的な見解も紹介されていました。

- ◇ この非認知能力を育てるにはどうしたらよいか、もっとも気になるところです。まず、非認知能力がどんなものかを知るところから始めたらよいのではないかと思います。ベネッセがまとめたものによると、次のようなものが含まれていると書かれていました。

◎目標を達成するための「忍耐力」「自己抑制」「目標への情熱」

◎他者と協力するための「社会性」「敬意」「思いやり」

◎情動を抑制するための「自尊心」「楽観性」「自信」

これらは、ただ「我慢しなさい」「諦めるな」と言うておけば身につくものではないことは、誰が考えても分かることです。これらは、それぞれを体験を通して知る必要があると考えます。このことを、國學院大學の新富先生は、「“知る”から“識る”への転換」と言われています。

- ◇ この非認知能力が、日本の学校教育が近年、育成を目指してきた「生きる力」の構成要素であることは、間違いないことだと思っています。これらは、特別活動の実践によって育てることができるということも、理解していただけたと思います。

このことを今一度確認し、特別活動でどのような実践を行うことが非認知能力を育てることにつながるのか、考えていきましょう。

文責 スギタ